

3 課題を抱える青少年を支援する体験活動事業  
ア 課題を抱える青少年を支援する体験活動事業

「生活・自立支援キャンプⅠ」  
わくわくチャレンジキャンプ(佐賀)

〔主催〕 国立諫早青少年自然の家

〔期日〕 令和5年8月7日(月)10:00 ~ 8日(火)14:15 【1泊2日】

〔会場〕 国立諫早青少年自然の家

〔参加者〕 児童養護施設 22名(児童・生徒15名、職員7名)

〔担当職員〕 寺中 拓也、小野 栄策、松尾 天仁

1)趣旨

児童養護施設の子供たちが、自然体験や生活体験を通じて、自尊感情を高めるとともに、体力の向上及び基本的な生活習慣の定着を図る。

2)SDGsで目指す姿

		<p>目標4 質の高い教育をみんなに 全ての子供たちに質の高い自然体験活動を提供し、自尊感情の向上を図る。</p> <p>目標16 平和と公正をすべての人に グループ活動における様々な課題解決を体験する中で、平和的な意思決定の方法を理解する。</p>
--	--	---

3)目標

- ①自然体験や生活体験を通じて、自尊感情を高める。
- ②体力の向上、基本的な生活習慣の定着を図る。

4)プログラム

1日目	2日目
10:00 入所式	6:30 起床、荷物整理、清掃
10:40 沢登り(グループ①) 【写真①】 モルック(グループ②)	7:15 朝のつどい
12:00 昼食(弁当)	7:40 朝食(レストラン)
13:00 沢登り(グループ①) 端材クラフト(グループ②) 【写真②】	9:00 流しそうめん準備 【写真⑤】
16:00 夕食(野外炊事) 【写真③】	12:00 昼食 【写真⑥】 (流しそうめん、フルーツポンチ)
19:00 ナイトハイク、花火 【写真④】	13:00 アイスクリーム作り
20:00 入浴 一日の振り返り	14:00 解散式
21:30 就寝	

## 5)事業展開

### ①沢登り（グループ①）



最初は恐る恐る進んでいる子供もいましたが、途中からは中高生が小学生をリードし、手を差し伸べたり励ましたりする姿が見られました。

### ②端材クラフト（グループ②）



端材を用いて、オリジナリティあふれる作品が出来上がりました。また、片付けまで、しっかり取り組みました。

### ③1日目夕食（野外炊事）



ファイヤースターターで火をつける体験をした後に、バーベキューを楽しみました。

### ④ナイトハイク、花火



自然の中の真っ暗な暗闇の静けさを体験するとともに、花火をして夏らしさを感じました。

### ⑤流しそうめん準備



流しそうめんの土台を自分たちで作成しました。また、フルーツポンチの白玉をこねるなど、一人一人好きな活動に組み込みました。

### ⑥2日目昼食（流しそうめん、フルーツポンチ）



流しそうめんは大盛り上がりでした。そうめんの他、ウインナーやチェリーなどを流し、目の前を流れていくたびに歓声が上がっていました。

## 6) 評価

### ① アンケート結果(事業全体に対する満足度)

満足	やや満足	やや不満	不満
80%	15%	0%	5%

### ② 参加者の声

#### ○ 児童、生徒

- ・ これからも料理のお手伝いをしたい。
- ・ キャンプで火起こしができるようになったし、流しそうめんの竹の縁取りで初めてのみを使って、上手にできるようになった。
- ・ 初めてアイスクリーム作りをして楽しかった。

#### ○ 職員

- ・ 普段の生活では考えられない子供たちの新しい一面が見られた。沢登りでは、苦戦する小学生を高校生が積極的にサポートする姿や声掛けがあり、感動した。
- ・ 園での生活よりも自然と会話できる場面が多く、一緒に非日常を味わうことができた。

## 7) 成果と課題

### ① 成果

- ・ 連携先施設との事前打合せを綿密に行い、子供たちから要望があった流しそうめんを実施することができた。また、「過去のキャンプでは、職員が片付けに追われて大変だった。」という意見があったため、今回は準備、後片付けを意識づけるため、「JFA(じゅんび、FUN、あとかたづけ)」を2日間の合言葉とした。同施設の職員も驚く程、子供たちが積極的に「JFA」を頑張る姿が印象的であった。
- ・ 連携3年目となり、沢登りや野外炊事等の活動に見通しが持てるようになり、これまでと比較し積極的に取り組んでいる様子が見られた。また、初日の沢登りとクラフト活動、2日目の流しそうめん土台作りと材料準備等、活動を選択制にしたことで、自分の意志で好きな活動を選ぶことができたことも、積極的な取り組みへつながったと思われる。
- ・ 子供たちの身体的な負荷や、連携施設職員の業務負担を踏まえ、例年の2泊3日から1泊2日へ変更したことで、参加者が集まりやすかったという連携先職員の声があった。
- ・ 3年間の連携した取組により、子供たちの新たな一面などが見られ、本年度で連携最終年度となるものの、連携先施設としては次年度以降もこのような体験活動を継続していきたいと話をいただくことができた。

### ② 課題

- ・ 今年度で連携最終年度となるため、次年度以降も連携施設が体験活動の機会を得られるよう、継続的なサポートを行っていく。